

第二節 吉野川の洪水と災害

一 明治以前の洪水と災害

吉野川の洪水と災害の記録は、遠く奈良時代までさかのぼるといわれる。明治期以前の洪水については、断片的な記録が多くその全貌をつかむことができないが、古く承徳二年（一〇九八）に発生した洪水は、岩津狭窄部（阿波郡阿波町）やその上・下流の河道を大きく変えたといわれ、吉野川流路変遷史上注目されるものであった。

江戸時代になると、流域一帯に藍作が広がっていったが、定期的に繰りかえされた吉野川の氾濫は藍作に好適な肥沃な土壌を吉野川流域に堆積させたともいわれる。

しかし、人びとは豊かな水を目の前にしながら、吉野川の水を技術的にコントロールすることができず、流域農民は毎年のように洪水による被害に苦しんだ。流域農民の歴史は、吉野川の水との闘いの歴史であったともいえよう。

二 明治・大正期の洪水と災害

藩政末期から治水を目的とした堤防が築かれるようになったが、局部的なものであったために災害は後を絶たなかった。その後、明治十八年（一八八五）からは低水工事を、さらに明治四十年からは第一期改修を国直轄のもとに施工することになり、昭和二年には現在見られるような河道が概成された。

したがって、この間における洪水災害は、全川氾濫から徐々に洪水を河道に戻すなど、第一改修完了によって、洪水による災害の内容を一変させることになった。

昭和初期の昼間小学校裏山より見た吉野川の北岸風景の写真によると、対岸辻町を見渡すことができる。荒嘉明（平成元年・七九歳）の談によると、この時代には竹藪がなく昼間側の川岸を洗い出したので、青年団（田村嘉一他）が竹を植えたのが現在の竹藪であるという。



昭和初期の吉野川の北岸風景

三 昭和の洪水と災害

(一) 天橋立神社の石段が示す洪水の水位

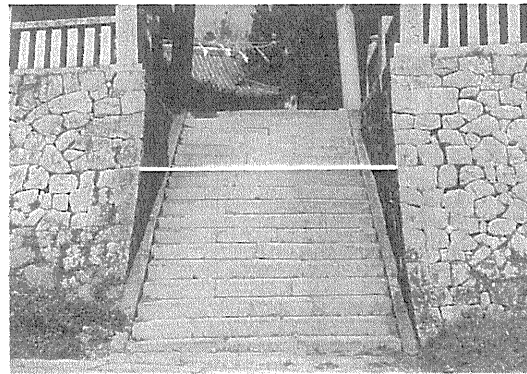
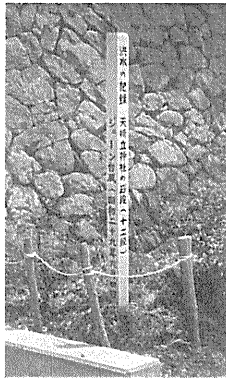
天橋立神社の総代安宅盤雄（昼間）の話によると、早明浦ダム・池田ダムがまだ完成していないころは、「吉野川の上流地方の降雨量が四〇〇ミリ以上になった」とラジオによる気象情報が流されると、平素は穏やかな吉野川が一転して暴れ川となり、小川谷土地改良区の五五町歩の田畑が出水によって冠水することが、一〇年に一回ぐらいいはあったという。

太平洋戦争終戦の年、昭和二十年から二〇年の間、戦争による乱伐のための保水力の低下の問題、堤防・護岸工事の未完成などの諸条件によって派生したものである。

この大洪水のことを町民は「島つけ」と呼び、農作物の収穫などに甚大な被害が生じた。「今度の水は大きかったのう。水が大宮はんの石段を一段目まできたそうな……」という会話が交わされた。

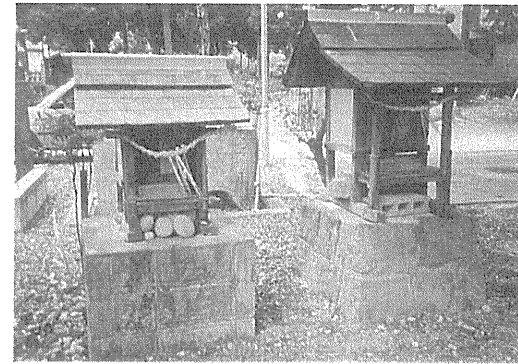
戦後、二回の島つけがあり、今も民家にその傷跡が残されている。

昭和二十九年には、一年間のうちに四回もの洪水がこの地方を襲い、吉



天橋立神社の石段水位（12段）

野川沿いの田畑は大きな被害を受けた。
 一回目は、麦の収穫期の出水であった。刈り取ったばかりの小麦が濁流に浮いて流され、農家の人びとはなすすべもなく、ぼう然と眺めるばかりであった。
 二回目の出水は、田植えの終わったばかりのころのである。この時には、まだ根を下ろしていない稲苗が表土とともに流出してしまった。農家では、近隣、他町村から稲苗を分けてもらい、近所や親類に手伝ってもらって、深耕して土を作り、田植えをやり直した。



天橋立神社境内に祀られた社幣能神（塞の神）（左）

三回目は、九月に襲来したジェーン台風による記録的な洪水であり、三好地方は「島づけ」状態となった。
 四回目は、さらに追い打ちをかけるように、ジェーン台風からわずか一日後にマリーナ台風が襲来した。ちょうど稲の収穫時と重なり、丹精込めた稲が無残にも倒伏・流出し、致命的な打撃を被った。日本の農村社会が敗戦の痛手から立ち直っていなかったころのことである。

(二) ジェーン台風とマリーナ台風

昭和二十九年九月四日に発生、十三日には中心気圧九五五ミリバール、半径五〇〇キロ以内は風速二五メートルの大型台風に成長し、九州を縦断して日本海に去ったものであるが、被害は九州・中国・四国をはじめ関東にまで及んだ。

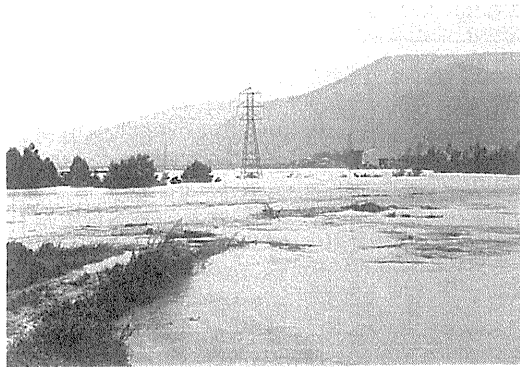
この台風は山間部に三〇〇〜七〇〇ミリという記録的な降水量をもたらしたため、各河川はあふれ、吉野川水系の洪水位は過去の記録をはるかに越える状態であった。

この時の洪水は島づけとなり、天橋立神社の正面の石段一二段までの水位に及んだ。
 天橋立神社の前方約五〇メートルの農道横の水田の中に、古くから社幣能神（塞の神）が祀られ信仰を集めていた。明治以後の幾度かの洪水にも、大きな石でおもしをしていたので流されなかったが、昭和二十九年九月のジェーン台風による「島づけ」には、さすがの神殿も流されてしまった。氏子が探していると、辻の渡船場横の丸山に流れた。

ついた神殿を発見した。氏子連中協議の結果、神社境内に移築することに決定した。

「塞の神」とは、石神・地藏・道祖神・道陸神ともいって、村への悪霊邪鬼の侵入を防ぐため、村境などの境界に祀られる神のことをいう。

ついで同年九月十八日には、マリーナ台風が発生し、九州に上陸後、愛媛県下を通過し中国地方を横断、大きな爪跡を残しながら日本海に走り去った。この台風は、国鉄史上最大の海難事故である青函連絡船洞爺丸の沈没という大惨事を起こした。



ジェーン台風による島づけ

第8章 水とくらし

1892	〃 25年 9月	徳島県下に大雨。諸川洪水。
1898	〃 31年 8月	吉野川大洪水。
1899	〃 32年 7月 9日	〃
1911	〃 44年 8月16日	〃
1912	大正元年 9月23日	〃
1928	昭和 3年	〃
1934	〃 9年 9月21日	室戸台風、洪水流量は10,000%と推定される。
1945	〃 20年 9月17日	枕崎台風、岩津において14,700%の洪水量を記録し、流量改定及び第2期改修の契機となる。池田町ほか4町で死者12人。行方不明3人。
1953	〃 28年 9月26日	13号台風、洪水流量は10,000%を突破し、各方面に大きな被害を出す。
1954	〃 29年 9月14日	12号台風、枕崎台風による洪水を上回り、岩津における洪水流量は15,000%を記録、治水計画の再検討の要因となる。
1961	〃 36年 9月16日	第2室戸台風、徳島県の浸水被害は高潮も加わり史上最大(岩津流量12,000%)。
1963	〃 38年 6月14日	集中豪雨、中洪水(岩津流量 7,000%)。
〃	〃 38年 8月10日	9号台風、中洪水(〃 9,500%)。
1964	〃 39年 9月25日	20号台風、(岩津流量 8,100%)。
1965	〃 40年 9月15日	24号台風、洪水期間長く、河道災害大(岩津流量 6,600%)。
1968	〃 43年 8月29日	10号台風(岩津流量11,000%)。
1970	〃 45年 8月21日	10号台風(〃 12,800%)。河道災害大。
1972	〃 47年 9月 7日	前線による集中豪雨。(岩津流量 8,500%)。
1974	〃 49年 9月 9日	18号台風(岩津流量14,500%)。上流無堤地区、下流内水地区で氾濫による被害甚大。
1975	〃 50年 8月18日	5号台風(〃 10,500%)。
〃	〃 50年 8月23日	6号台風(〃 13,900%)。上流無堤地区、下流内水地区で氾濫による被害甚大。
1976	〃 51年 9月12日	17号台風(〃 11,500%)。上流無堤地区、下流内水地区で氾濫による被害甚大。洪水期間長く河道災害大。
1979	〃 54年10月 1日	16号台風(〃 9,500%)。上流無堤地区、下流内水地区で氾濫による被害大。
1982	〃 57年 8月27日	13号台風(〃 11,000%)。上流無堤地区で氾濫による被害大。河道災害大。
1990	平成 2年 9月19日	19号台風(〃 11,200%)。上流無堤地区、下流内水地区で氾濫による被害大
1993	〃 5年 7月28日	5号台風(〃 12,100%)。上流無堤地区、上下流内水地区で氾濫による被害大
〃	〃 5年 8月10日	7号台風(〃 10,600%)。上流無堤地区、下流内水地区で氾濫による被害大

出典 建設省 中国地方建設局監修『吉野川 その治水と利水』

吉野川における災害年表

西暦	発 生 年 月 日	記 事
886	仁和 2年	大洪水。(西林村古記録より)
1098	承德 2年	大洪水現在の岩津狭窄部に流路を変える。(西林村古記録より)
1579	天正 7年 8月	大水去らぬこと3日。
1674	延宝 2年 8月17日	中四国、九州に50年来の大風と高潮。(徳島県史から)
1687	貞享 4年 9月 9日	大風水害、田畑の流失甚大。(蜂須賀家記)
1701	元禄14年 7月10日	三昼夜にわたり大洪水。舞中島全戸流失。(名東郡史、高原村史)
1721	享保 6年 8月10日	五日間風雨大洪水、流失家屋99戸、農作物 減 92千石、死者 9人、牛馬 104頭。(年表秘録)
1729	〃 14年 9月	暴風雨大水害、農作物被害23万石。(阿波志)
1738	元文 3年 6月21日	洪水河堤を決壊(池田町史)農作物被害7万3千石。(年表秘録)
1772	安永元年 8月20日	洪水農作物被害11万7千石、死者88人、流失家屋70戸、藩士の俸禄は3年に限って半分を収む。(蜂須賀家記)
1785	天明 5年 3月27日	風雨、洪水、農作物被害10万石、日開谷川左岸破堤。
1792	寛政 4年 7月19日	板野郡地方大水害、堤防数箇所破堤、各地で秋祭できず。(板野郡史)
1795	〃 7年 7月 8日	風雨、出水、農作物被害13万1千石。(年表秘録)
1816	文化13年 8月 2日	風雨洪水、農作物被害16万3千石、死者 9人。高潮襲来。
1843	天保14年 7月 5日	二日間大豪雨、7日に大洪水、50年来の大水といわれ流失家屋多し(板野郡史)これを七夕水という。西須賀村は破堤により数十日間湛水。(川内村史)
1847	弘化 4年 7月14日	吉野川としては著名の大洪水となる。(蜂須賀家記)
1849	嘉永 2年 7月 8日	四日間大風雨、阿波全土に被災、旧吉野川及び川田で破堤、死者 256人、流失家屋56戸、収穫は平年の6分。(板野郡史)
1857	安政 4年 7月 1日	未曾有の大暴風雨、被災の模様江戸將軍の耳に達す。(徳島県史)
1860	〃 7年 5月11日	七日間の大雨により洪水、阿波全土が大半浸水破堤各所に有り。(板野郡史)
1866	慶応 2年 8月 1日	七日間降り続き未曾有の大氾濫となる。田畑は荒地と化し人畜、農作物、堤防などに大被害を受ける。(板野郡史)
1870	明治 3年 9月 9日	吉野川大洪水。
1885	〃 18年 6月	〃 (茶園嶽大崩壊)
1889	〃 22年	暴風雨。